JK魔法少女はザコ怪人(ナメクジ)の
同族お嫁さんに堕ちる♥

遥か古代、

宇宙より飛来した遺伝子――

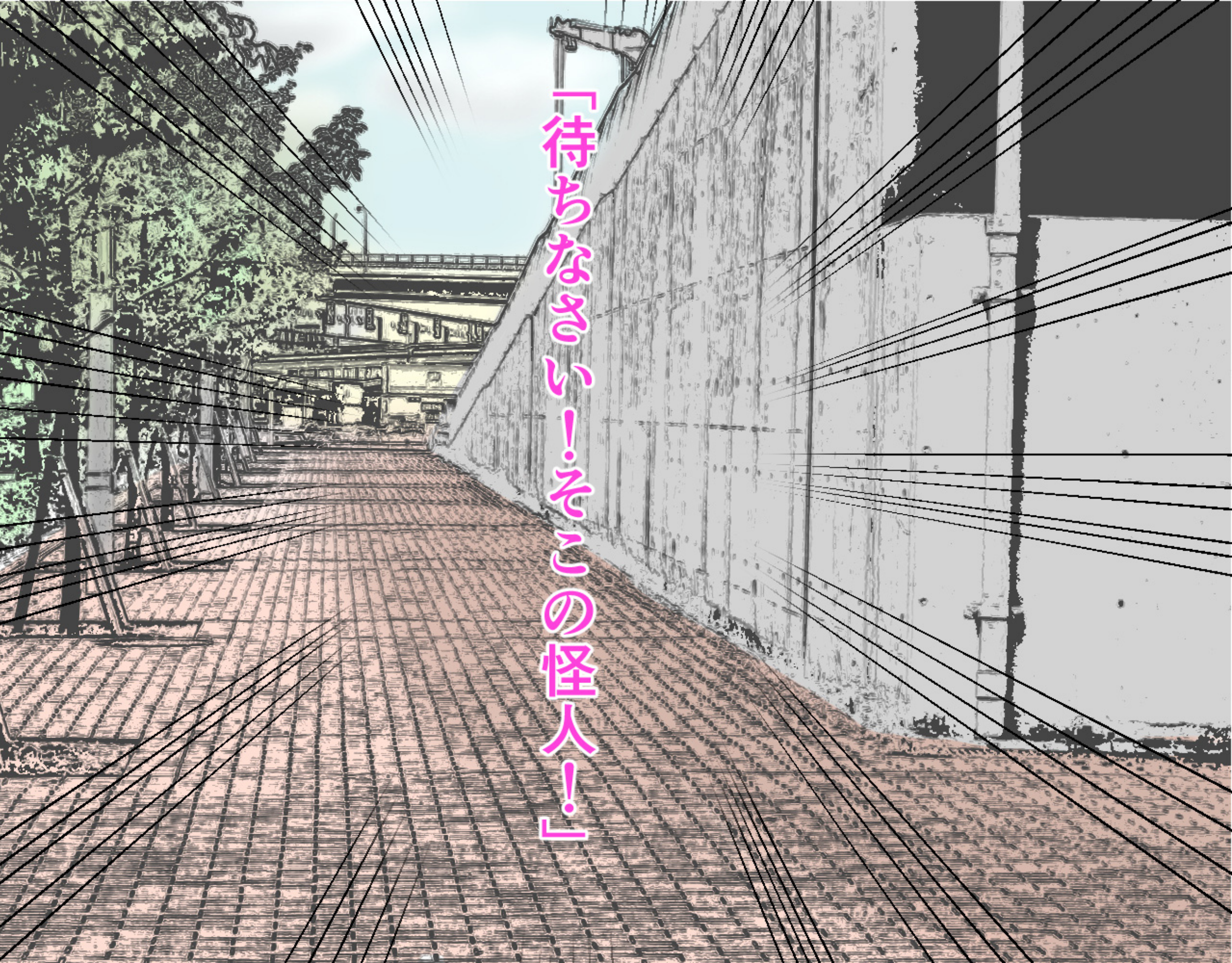
それを持つ人間を超越した存在…

それが、怪人。

いつの世も、ひとは違う存在を迫害し続ける…
ひとならざる怪人はまさにその恰好の的であった。

あくる日、怪人たちは徒党を組み、人間たちに復讐を誓った。
それが今日まで続く怪人結社“ヴェノムス”である。

『フハハハ！この街の人間みなミンチだ！
俺のタンパク源になるがいい！』


「待ちなさい！そこの怪人！」

「待たせたわね 街の皆、もう大丈夫よ！」
「ふ、来たか…」

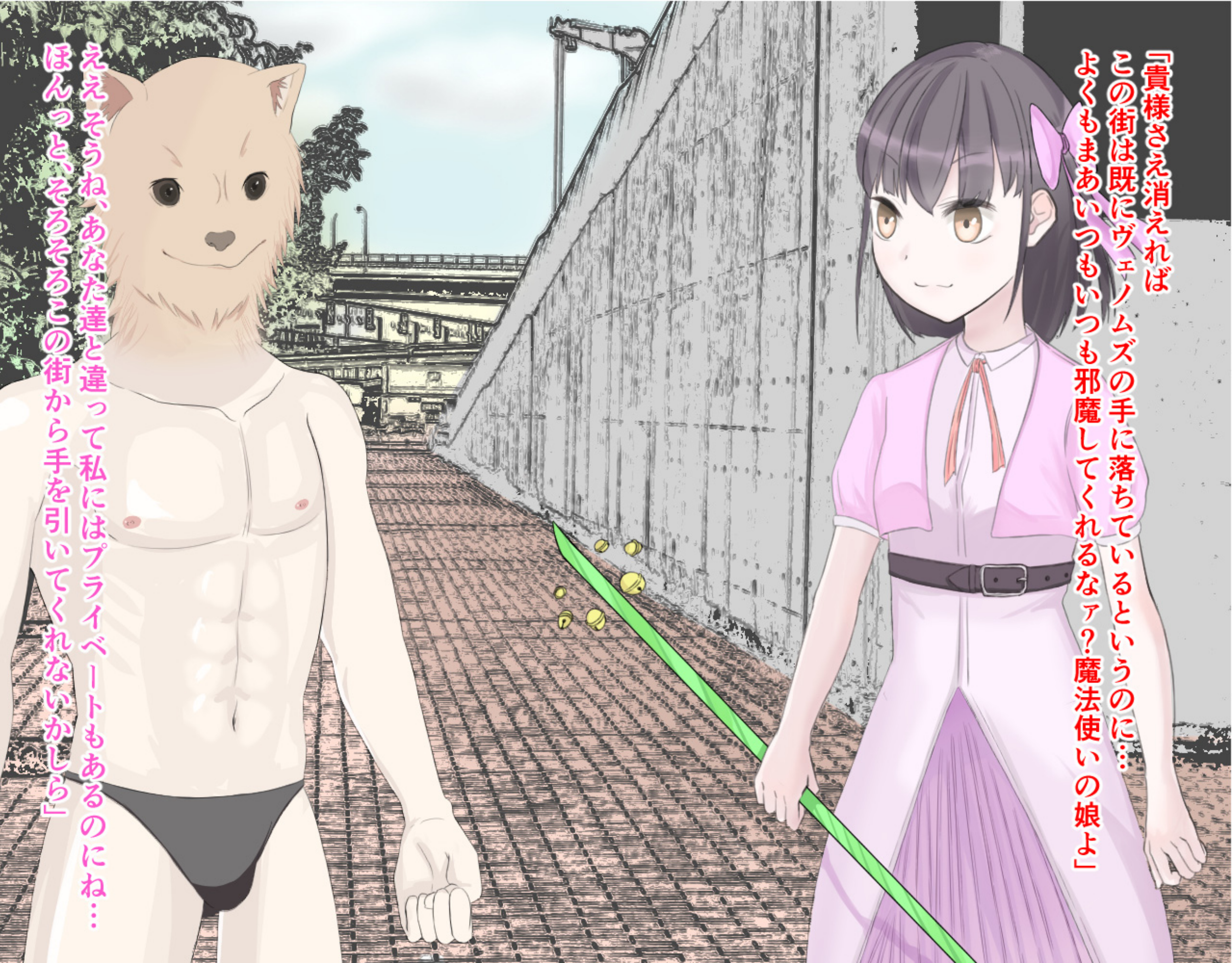
「おお……」

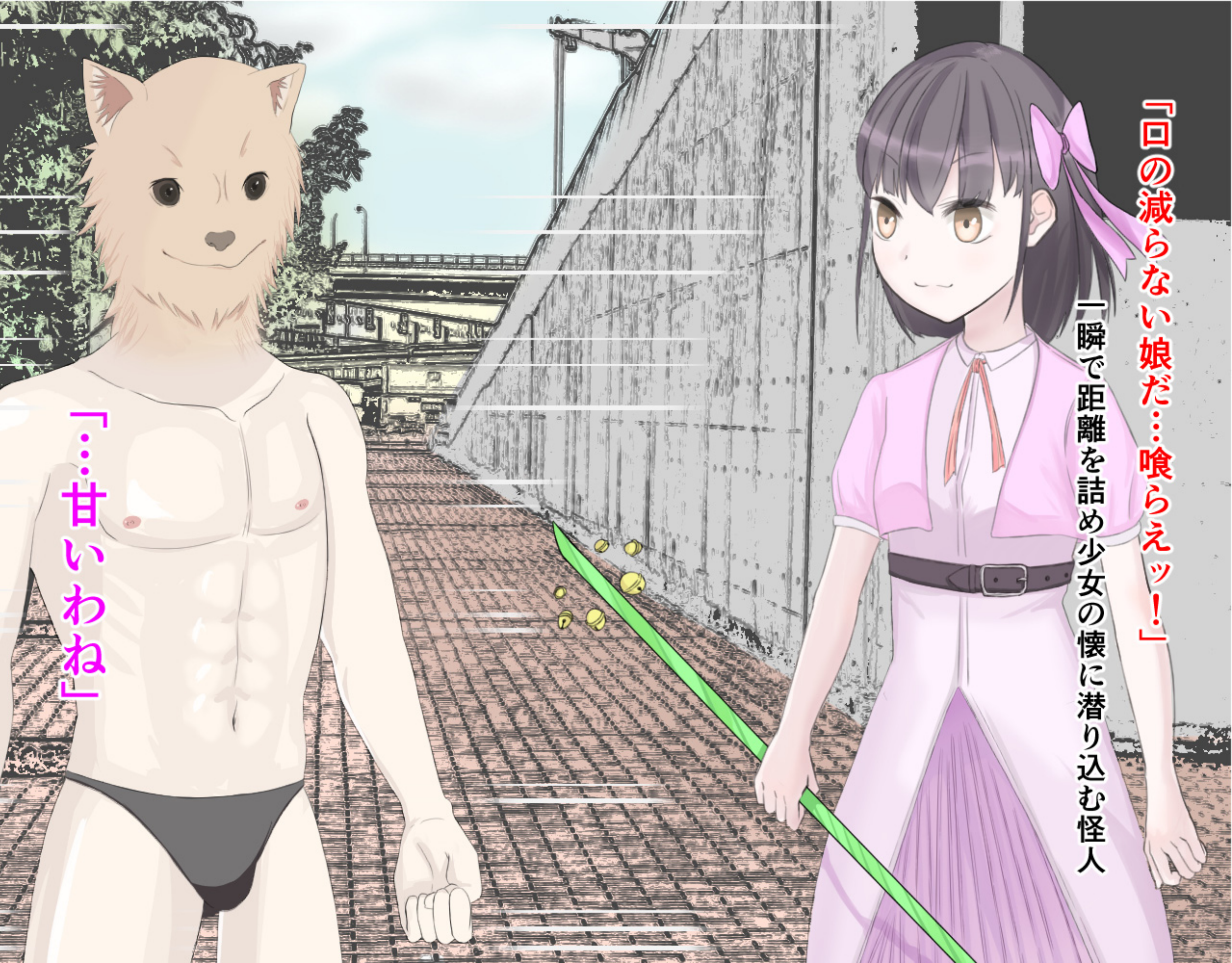
「助かった……」

「魔法少女のスズハだ！」

ザワ

ザワ


「貴様さえ消えればこの街は既にヴェノムズの手に落ちているというのに…よくもまあいつもいつも邪魔してくれるなァ？魔法使いの娘よ」
ええそうね、あなた達と違って私にはプライベートもあるのにね…ほんっと、そろそろこの街から手を引いてくれないかしら」


「口の減らない娘だ…喰らえッ！」
一瞬で距離を詰め少女の懐に潜り込む怪人
「…甘いわね」

「久々に肉体系の怪人が来たと思ったらこんなものなの」

「グッ…」

（こいつ…あの一瞬で俺にカウンターを…？）

「今日は機嫌も悪いし時間もないからとっとと片付けさせてもらうわよ！」

「まっ…やめろ！」

「封印魔法！」

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

魔法少女“スズハ”が杖を怪人に振りかざした瞬間、
2メートル程あった巨体はビー玉サイズに凝縮され
スズハの杖に取り込まれていった

「ふう、今日は中の下ってとこかしら」

「倒したのか⁉」

「さすが魔法少女だ！」

「スズハ‼」

「しかも可愛い！」

「は…はは、どーも どーも」

—今日もスズハは観衆に讃えられながら現場を足早に去っていく

「スズハちゃ～ん どこ～？」
「スズハ～サインちょうだい～！」
「はあ…こんな調子じゃ変身を解くのも一苦労ね」
「狭い街だしん。それに今この街の魔法少女はスズハ1人だけだしんね。でももう少しで契約できそうな、魔法少女候補生は1人いるしんよ！」

私の名前は涼風晴香、女子高生。
最近魔法少女をはじめてみた…

この浮いてるまんまるいマスコット的な存在は
“ウォープル”魔法少女になる資質を持った少女にだけ見える
精霊のようなもの……らしい。

「じゃあその娘の契約が済んだら教えて頂戴。協力制にしようかしら…分業制にしようかしら……」
「了解だしん！」

かくいう私もこいつと出会って魔法少女になる契りを交わしたのはほんの数ヶ月前……

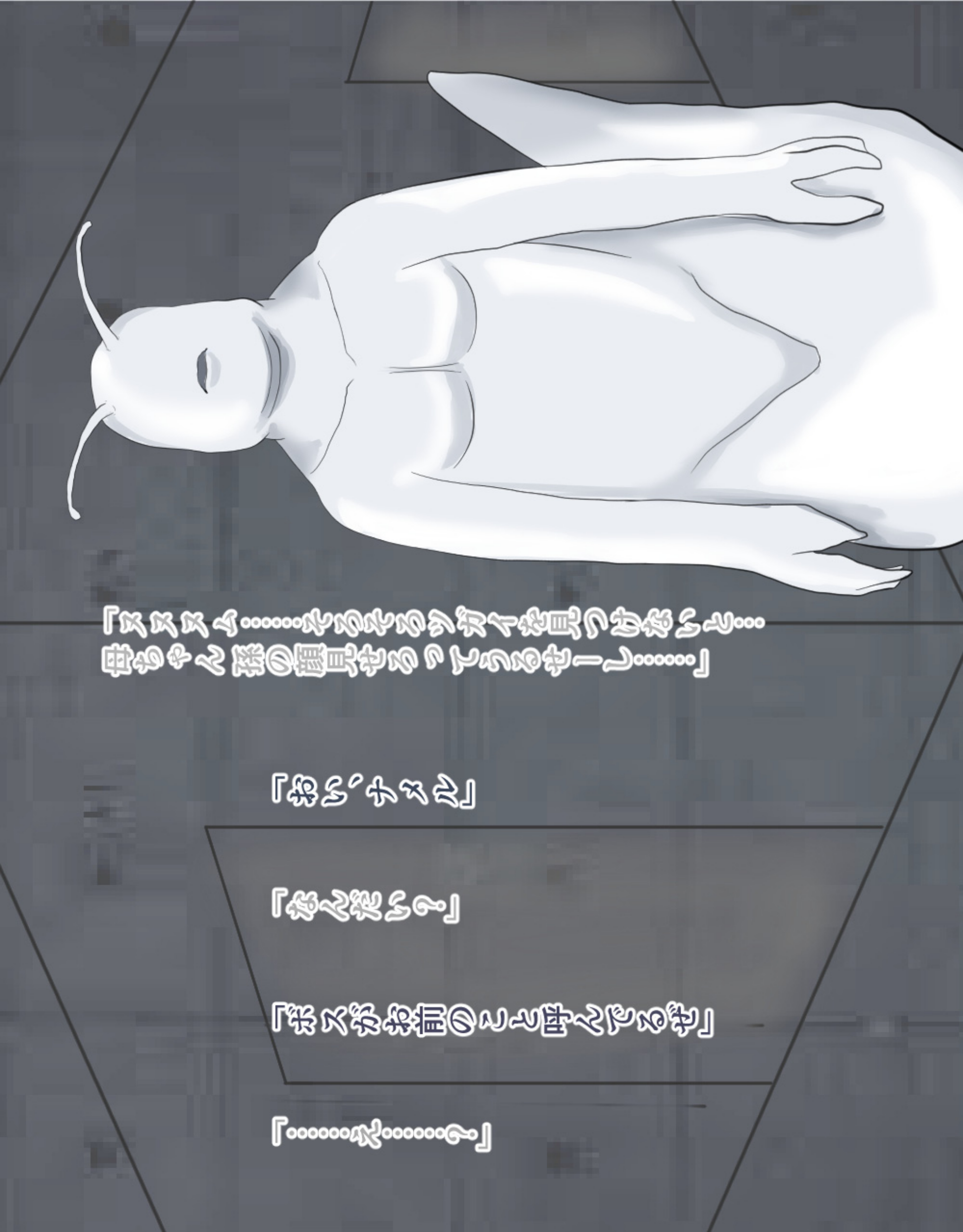
最初はなんであんな屈強な怪人にこんな私が対抗できるのか不思議だったけれど…

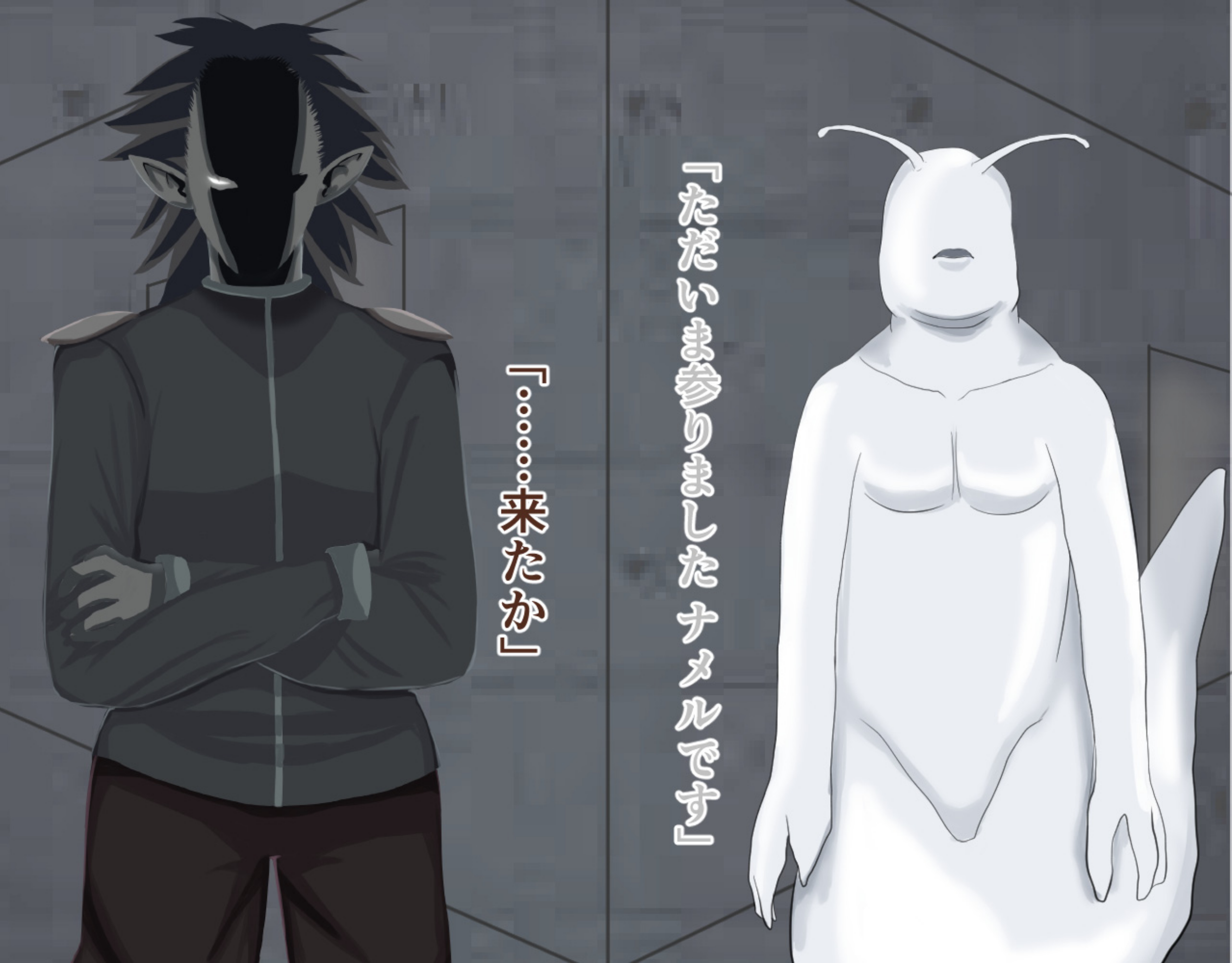
怪人の力の根底にあるのは地球外のエネルギーらしく、魔法少女になれば人の身にしてその力が自由に振るえるようになると、ウォープルに説明を受けた。

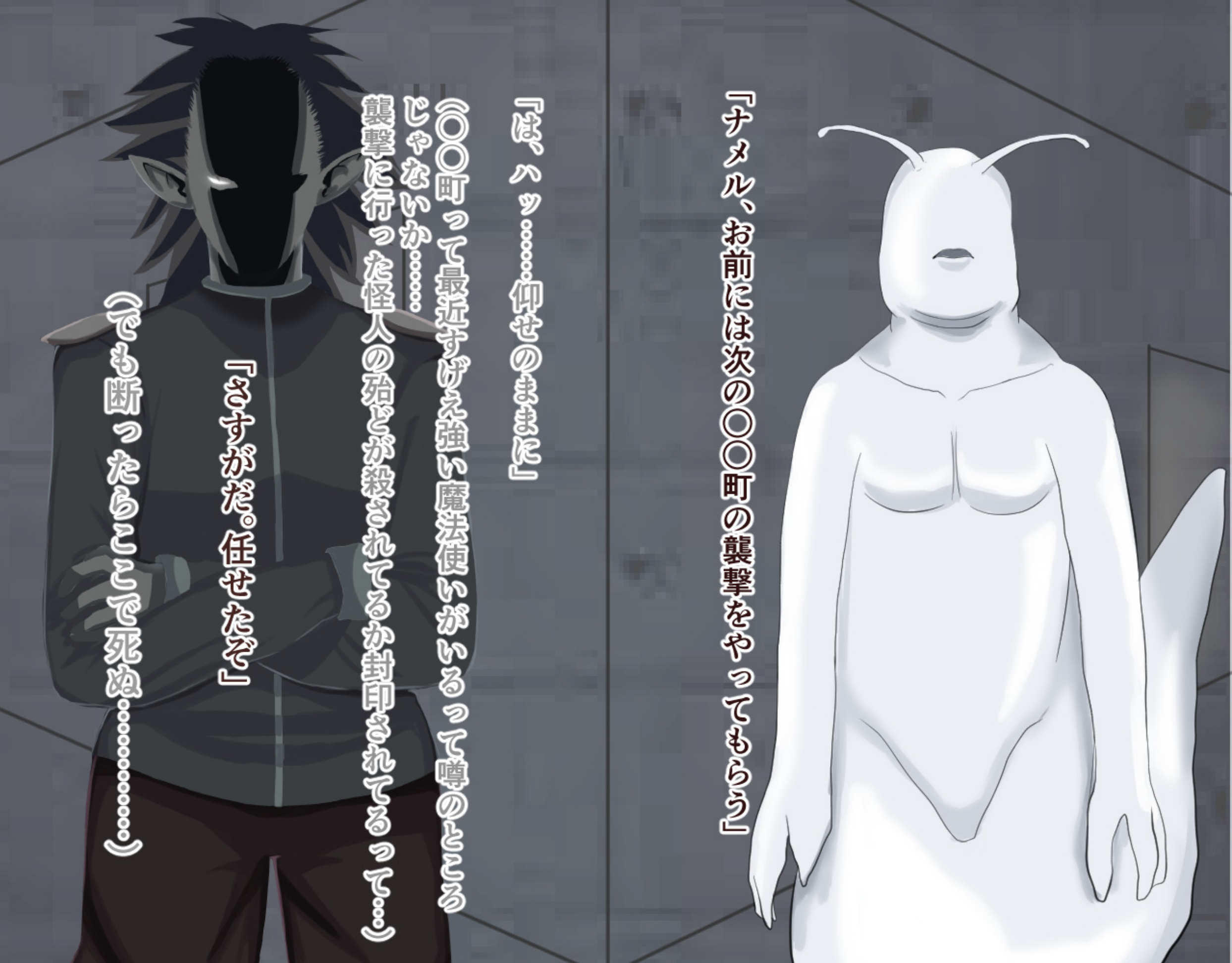
まあまだ私はこいつを100%信用しているわけではないけれど……

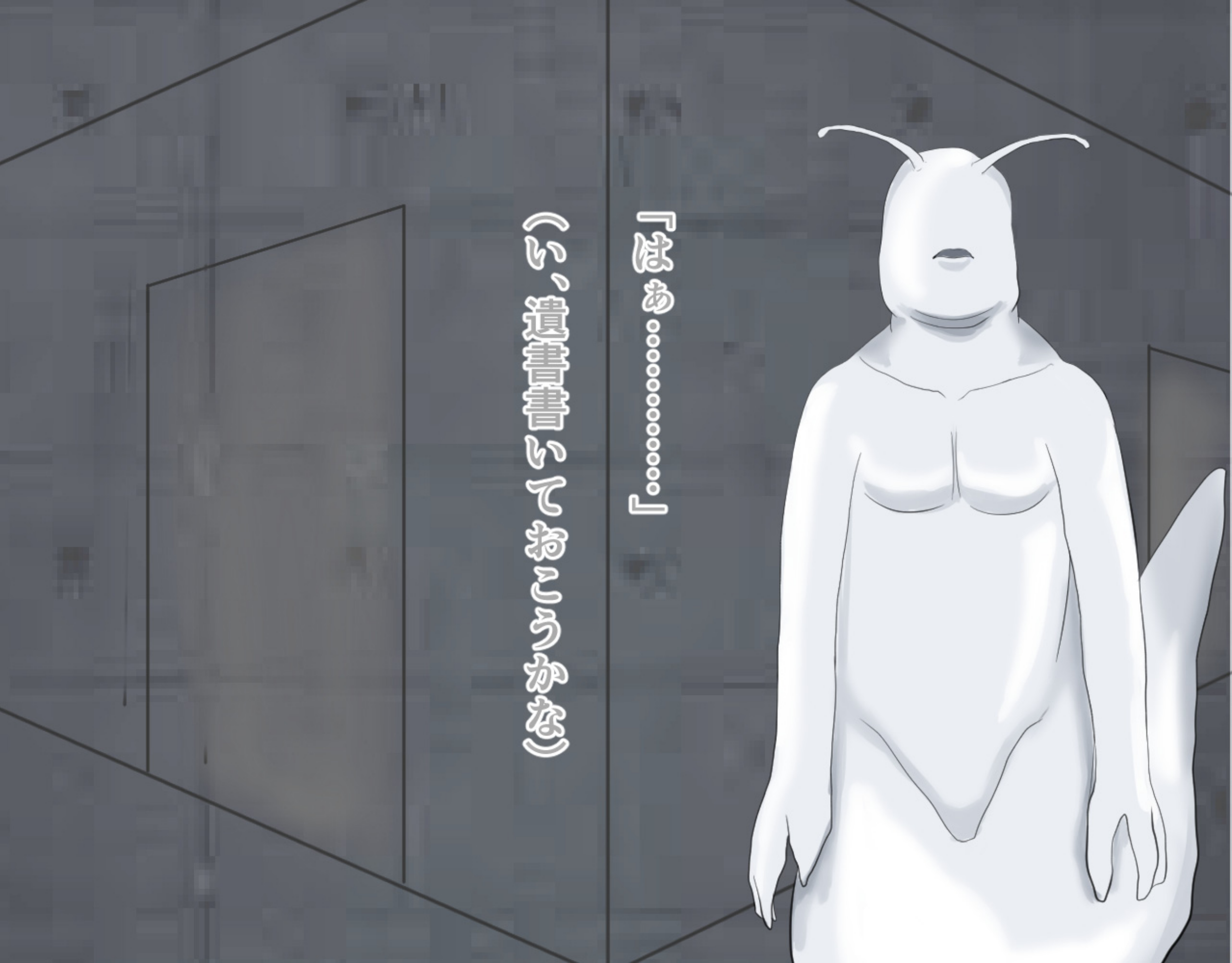
「まあ 私は帰って寝るわ。
このところよく怪人が出没するし、
明後日からはテスト期間だしね」
「……おやすみだしん」

# ダンジョン探索ルート


「ハハハ……ホントホントヨケテ回ってやがる…
中ボスと体の無駄ヤの「トンネルヤー」……」
「やっかいな」
「やっぱ殺るっ」
「ヤバイやや振りいい甘えドンヤ」
「……ヤ……っ」


「ただいま参りましたナメルです」
「……来たか」

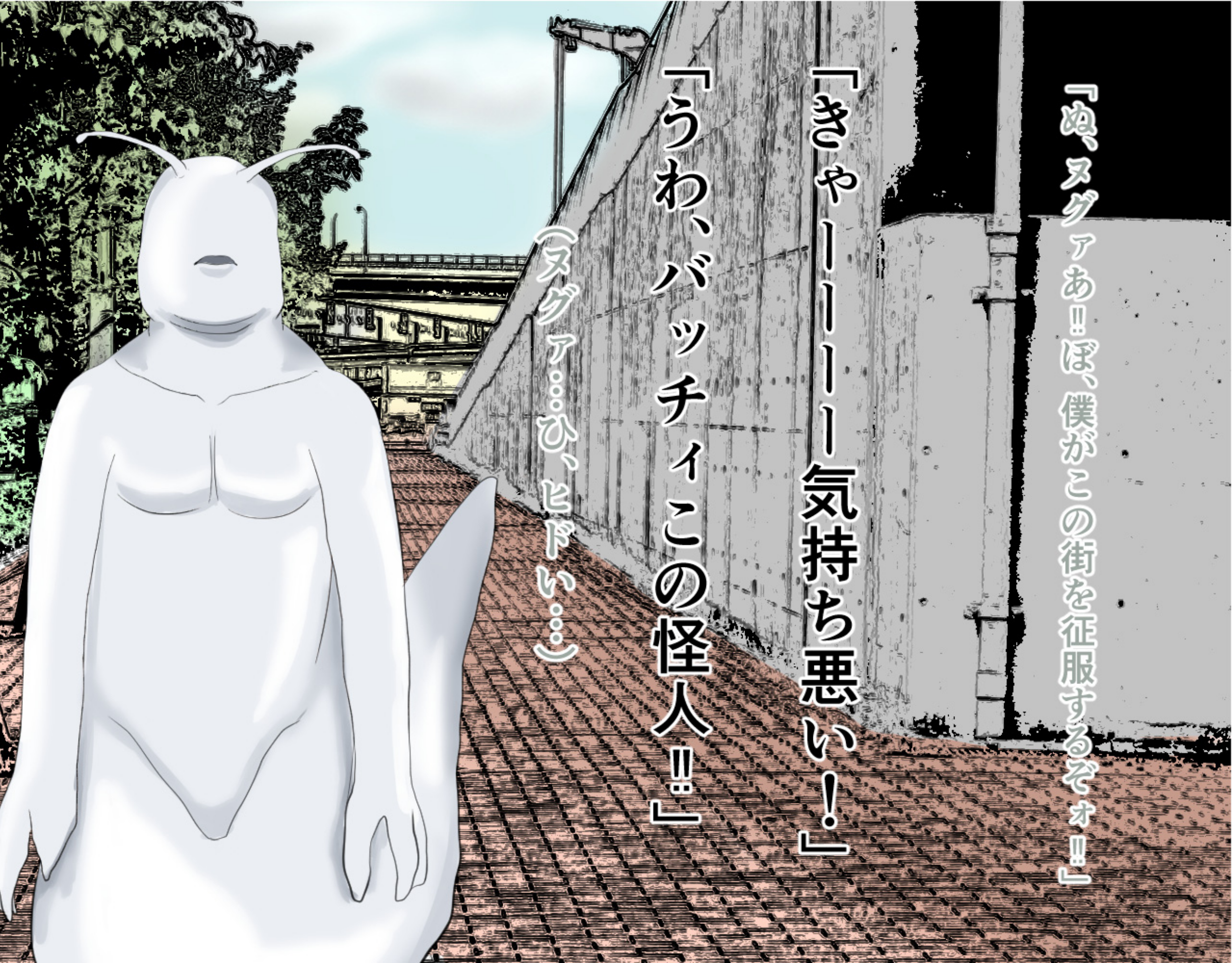

『ナメル、お前には次の〇〇町の襲撃をやってもらう』
『は、ハッ……仰せのままに』
(〇〇町って最近すげえ強い魔法使いがいるって噂のところじゃないか……襲撃に行った怪人の殆どが殺されてるか封印されてるって…)
『さすがだ。任せたぞ』
(でも断ったらここで死ぬ……)

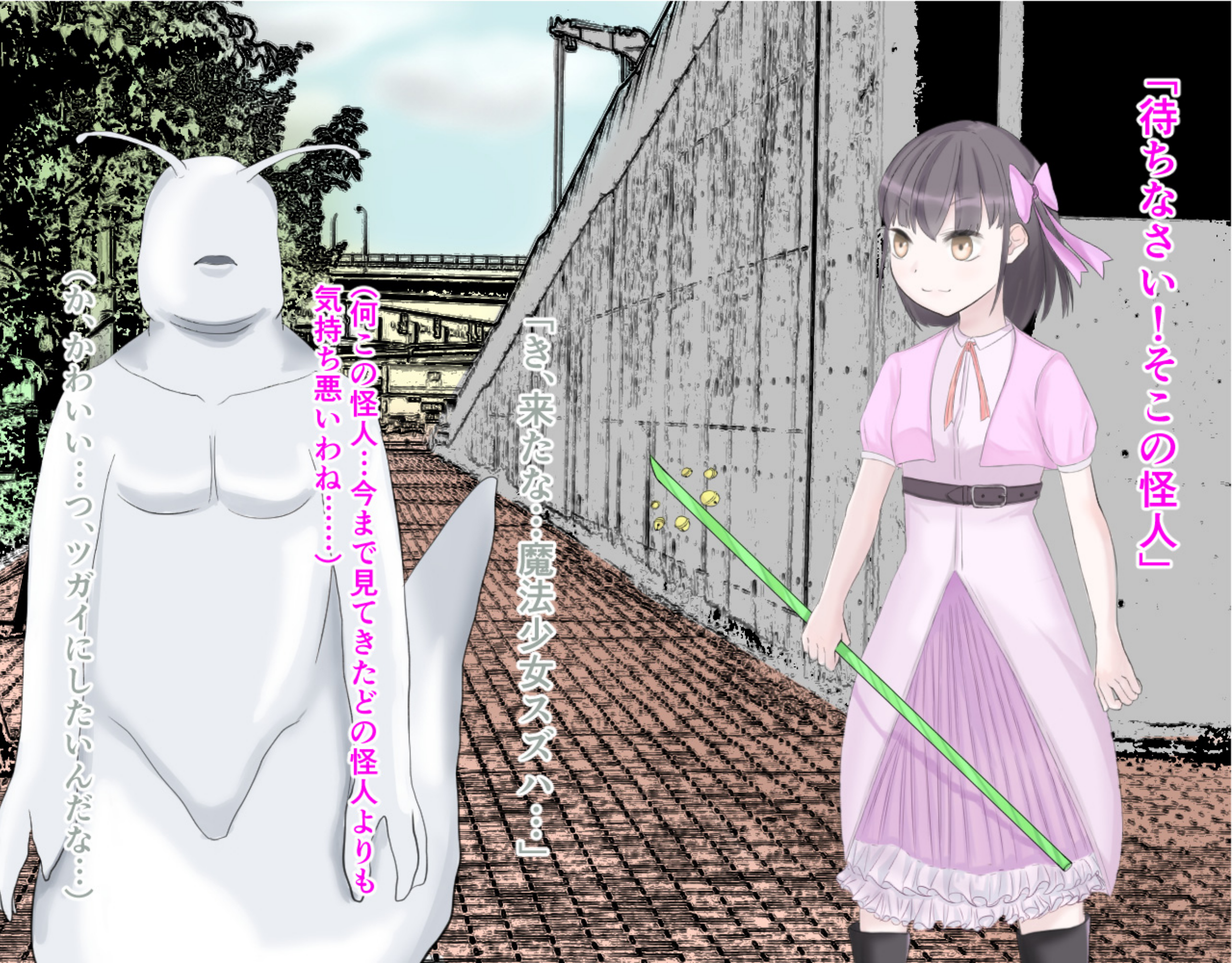

『はぁ……』
『……』
（い、遺書書いておこうかな）

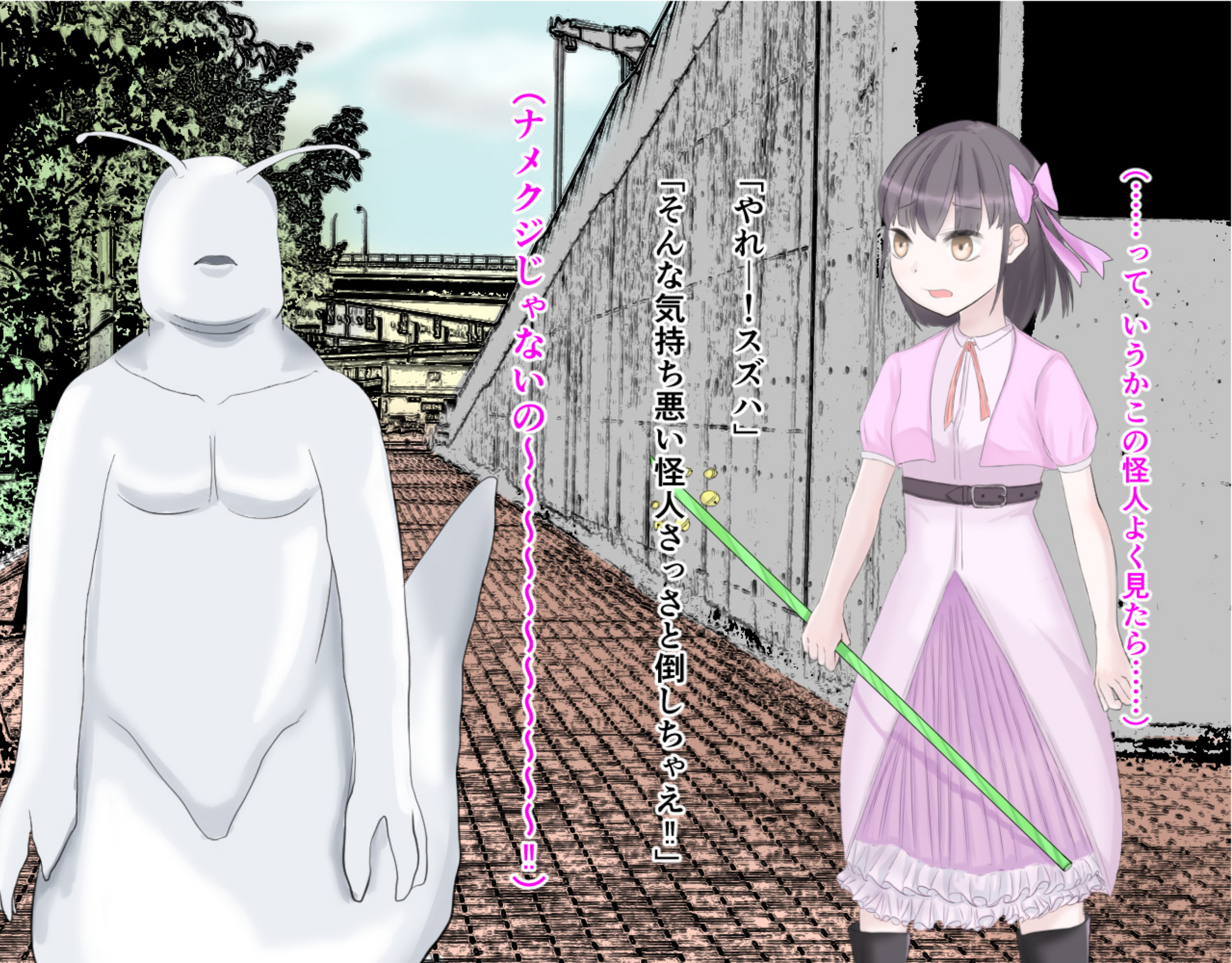
キンコン カンコン

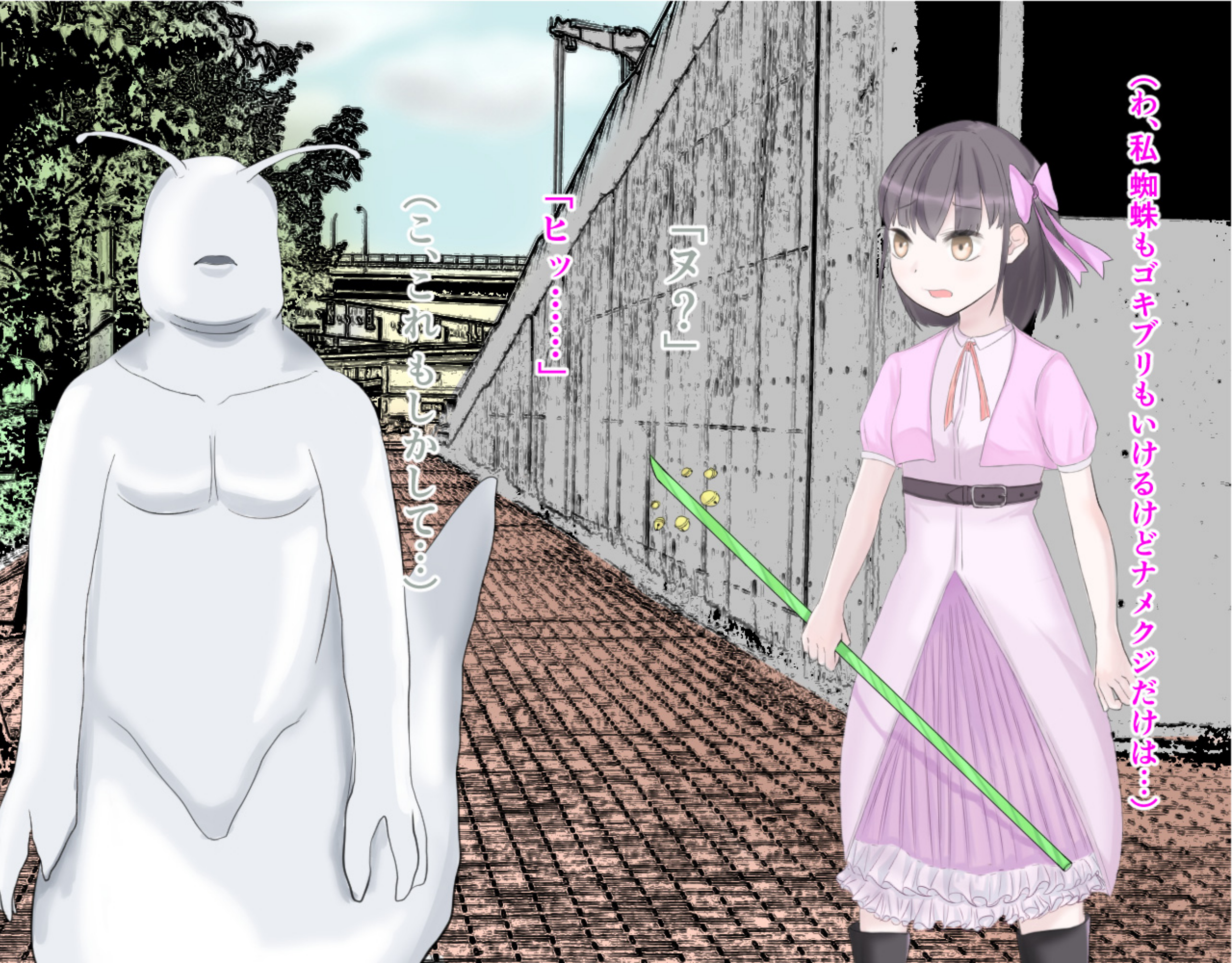
「はぁ〜〜テスト終わったぁ〜
晴香 どうだった？」
「わ、私は普通だよ」
「え〜晴香の普通ってことはめっちゃ順位上位じゃん!!
はぁ〜羨ましいなぁ〜」
「い、いや…そんなことないよ。ははは…」
（まあここ数日、怪人も出なくて
勉強できたしね）

「スズハ、怪人が出た！いつものところだしん!!」
「ごめん、花梨ちゃん。私 気分悪いから保健室に行ってくるね」
「え、うん大丈夫？。」
「大丈夫！」
（走って行っちゃった……
それに晴香ちゃん、何か小さい鳥みたいなのとお話してたような…気のせい？）


『ぬ、ヌグァあ!!ぼ、僕がこの街を征服するぞォ!!』
『きゃーーーー気持ち悪い!』
『うわ、バッチィこの怪人!!』
(ヌグァ…ひ、ヒドい…)


「待ちなさい！そこの怪人」
「き、来たな…魔法少女ズハ…」
（何この怪人…今まで見てきたどの怪人よりも気持ち悪いわね……）
（か、かわいい…つ、ツガイにしたいんだな…）


（……って、いうかこの怪人よく見たら……）
「やれー！スズハ」
「そんな気持ち悪い怪人さっさと倒しちゃえ!!」
（ナメクジじゃないの～～～～～～～～～～!!）


（わ、私 蜘蛛もゴキブリもいけるけどナメクジだけは…）
「ヌ？」
「ヒッ……」
（こ、これもしかして…）

『お、おい！そうやって座り込んで…僕の油断を誘う気か!?』
「……」
（これ…ほんとに僕にビビってる…？）

ゴクリ……

『う、ウガぁ～～～』

（い、いける…）

「お、おい…これスズハ負けるんじゃないか？」

「のんきに観戦してる場合じゃないぞ」

「逃げろォおおお！」

「きゃ～～～～～～～～！」

『ヌフフ…逃げちゃったね、君の守るべき人たち…』

「あ…あ…」

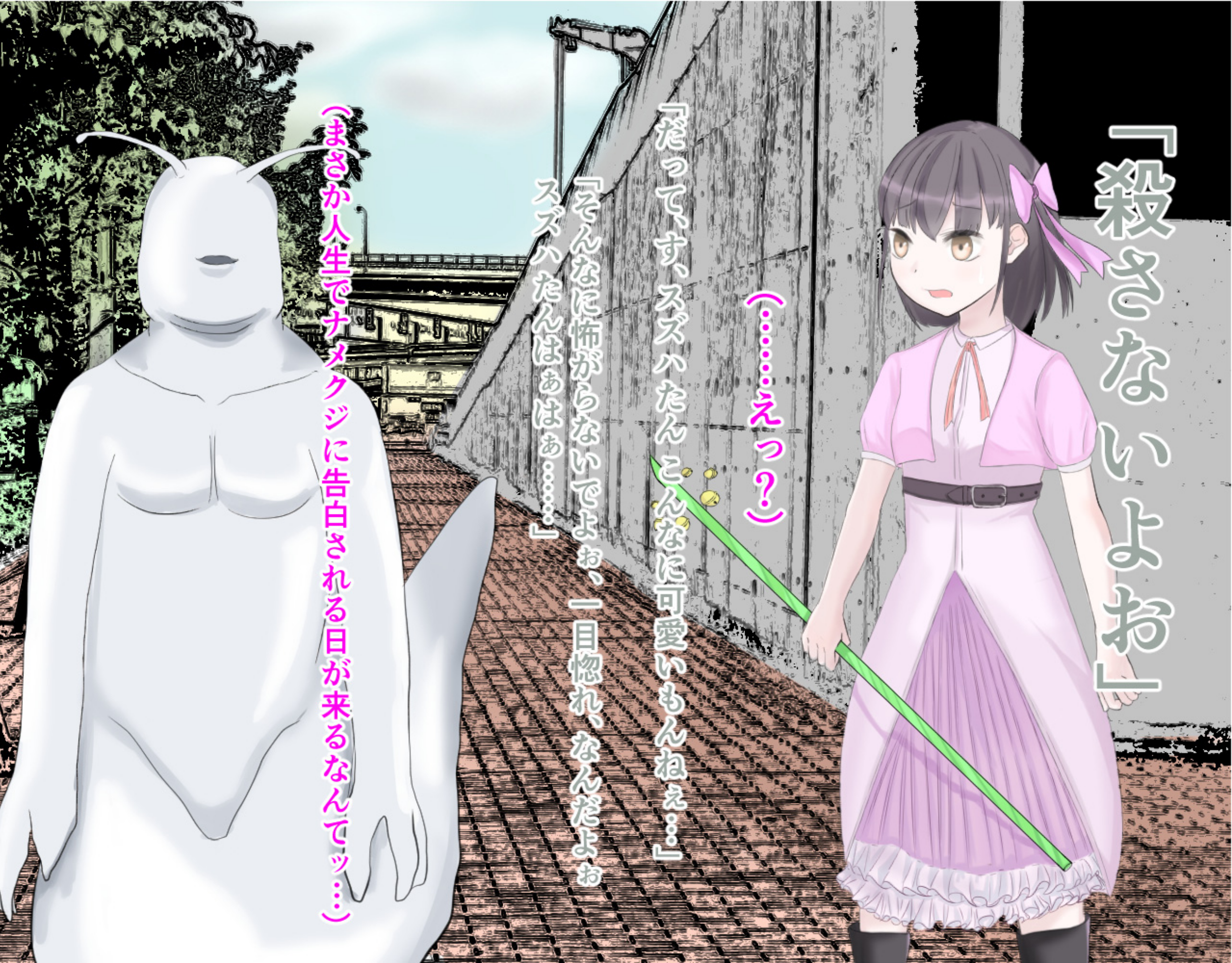
（身体が動かない……
ウォープルどこ？助けて……）

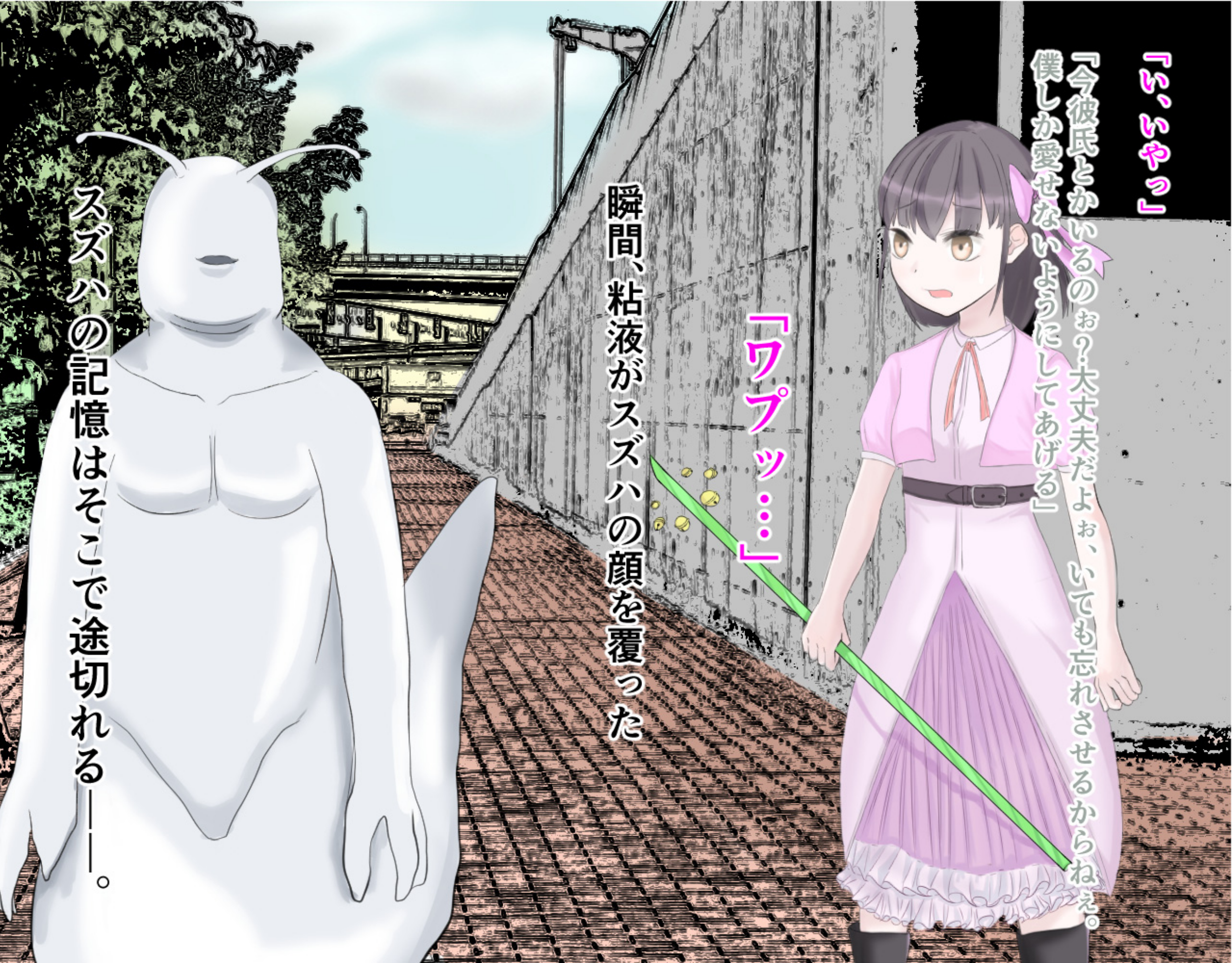
「んん～～、どうしようかなぁ」

「ヒッ……」

（こんなことになるなんて…
魔法少女なんかになるんじゃ…
なかった……）

「わ、私を殺すの…？」


「殺さないよぉ」
（……えっ？）
「だって、す、スズハたんこんなに可愛いもんねぇ…」
「そんなに怖がらないでよぉ、一目惚れ、なんだよぉ
スズハたんはぁはぁはぁ……」
（まさか人生でナメクジに告白される日が来るなんてッ…）


「い、いやっ」
『今彼氏とかいるのぉ？大丈夫だよぉ、いても忘れさせるからねぇ。僕しか愛せないようにしてあげる』
「ワプッ……」
瞬間、粘液がスズハの顔を覆った
スズハの記憶はそこで途切れる――。